

## 連載 プロマネの現場から

### 第 93 回 「少彦名くすくなさま」・『古事記』のころ

蒼海憲治(大手 SI 企業・金融系プロジェクトマネージャ)

新年にあたって、『古事記』のエピソードから「少彦名くすくなさま」について紹介したいと思います。

昨年末、一年の疲れをとろうと思い、四国・愛媛県松山市にある道後温泉に行ってきました。道後温泉は、日本国内でも一番古い歴史を持つといわれる温泉の一つであり、夏目漱石の小説『坊っちゃん』にも登場する「道後温泉本館」が有名です。大国主命（おおくにぬしのみこと）とともに、国づくりを行った少彦名が、旅の途中で立ち寄り、温泉に入って元気を回復し石の上で踊り出したという「玉の石」など、周辺には少彦名に関する碑や像があります。

以前のメルマガ（<http://www.issj.net/mm/mm09/09/mm0909-pg-pg.pdf>第 81 回 ふくろしよい&あかいだき・『古事記』のころ）にて、《ふくろしよい（袋背負い）のころ》と《あかいだき（赤猪抱き）》という大国主命の物語を紹介しましたが、この2つのエピソードには続きがあります。

今回の『古事記』解釈も、阿部国治さんによります。

兄の八十神（やそがみ）たちに二度殺された大国主命は、その都度生き返らせてもらうのですが、その後も、八十神たちから命を狙われ続けます。

そのため、根の国（ねのくに）に住む須佐能男命（すさのおのみこと）のもとへ修行に向かいます。

その時の心境は・・・

男児立志出郷関。学若無成死不還。埋骨豈惟墳墓地。人間到处有青山。

男児（だんじ）志（こころざし）を立（た）てて郷関（きょうかん）を出（い）づ。  
学（がく）若（も）し成（な）る無（な）くんば死（し）すとも還（かえ）らず。  
骨（ほね）を埋（うず）むる豈（あに）に惟（た）だ墳墓（ふんぼ）の地（ち）のみならんや。

人間（じんかん）到（いた）る処（ところ）青山（せいざん）有（あ）り。

根の国・死者の集う黄泉国になるのでしょうか、いったん入るとそこから出てこられるかどうか分かりません。命がけの世界になるため、さすがに八十神たちも追ってはきません。

しかし、須佐能男命は安穩と大国主命を受け入れたりはしませんでした。

大国主命は、須佐能男命が次から次に出す無理難題を解決する必要がありました。この難題を須佐能男命の一人娘である須勢理姫(スセリヒメ)のアドバイスを受けながら解決していきます。この問題解決を通して、大国主命は、《へみはらい》・蛇退治の術や灌漑技術など、当時の農業の技術などを身に付けることに成功します。

最新技術を身に付けた大国主命は、もとの世界にカムバックを果たします。そこで、大国主命は八十神たちと再び対峙するのですが、今回は、圧倒的な技術力の差を前に、八十神たちも服従を誓います。

その後、大国主命は、自分の持てる技術を駆使して、国造りに取りかかります。最初のうち、国造りは、どんどんはかどります。

大国主命は、喜び勇んで国づくりをはじめたのですが、しばらくすると、なぜか国中の人々の顔色が冴えないことに気づきます。

理由を尋ねても、要領を得ず、大国主命は行き詰ってしまいます。

そんな時出会ったのが、小さな小さな神さま、少彦名(すくなさま)・少名毘古那神(すくなびこな)でした。

少名毘古那神は、大国主命に、名前を尋ねます。

大国主命は、大国主命という名前だけではなく、大穴牟遲神(おおなむぢのかみ)、大名持神(おおなもちのかみ)、葦原色許男神(あしはらしこをのかみ)、八千矛神(やちほこのかみ)等々の名前を持っている、と答えます。実に16余りの名前を持っていました。

«「そうでしたか、わかりました。」

国造りの仕事を固めるためには、あなたはまず、その名を全部捨ててしまわなければいけません。一人でそんな良い名を持って、仕事の功績を自分のところに集めてしまったのでは、人心が倦むのはあたりまえです。・・・»

«「あなたが心配しているのは<国中のみんなが苦情を言わないけれども、

満足はしてはいないようだ。顔に元気がなく、目に光がない」ということでしょう。  
「どうです、思い当たりませんか」

ここまで言われて、大国主命は、自分の名前を捨てて、少名毘古那神の弟分となります。

そして、二人で全国を旅してまわります。

途中、色々な仕事をしたのですが、自分の名前は一切出さず、それらの仕事はみな少名毘古那神の仕事として伝えられました。

「ところが、その少名毘古那神は、居るのか居ないのかわからない神さまですし、  
そんな小人は誰も見たことがありません。  
こうして、誰がするのかかわからない良い仕事が、あちらこちらで進められましたので、  
初めて、国中に住むみんなの心のなかに

「ああ、ここはまことに住みよい、良い国だ」

という気持ちが起こってまいりました。」

そして、みんなの顔が、明るく希望に満ちてきました。

これに対する阿部さんの解釈はこうです。

「・・・どんなに他人の生命（いのち）の発展のためになるような仕事をして、  
それによって褒めてもらったり、名誉をもらったりしないようにしなければ、  
せっかくのよい仕事も、本当のよい仕事にはならないものだということが、  
力強く主張されておるのであります。」

実は、個人的には、大国主命に関わるいくつかのエピソードの中で、この少彦名（すくなさま）の物語が一番好きなものです。

このエピソードから連想する言葉は、「陰徳」です。「陰徳あれば必ず陽報あり」という『淮南子』の言葉がありますが、プロジェクトの推進において、技術力は最も重要な要素ですが、それを活かすも殺すも、マネジメントにおける陰徳・・・少彦名（すくなさま）の精神ではないか、と思っています。

ましてや、プロマネや上司には「命令する権利」があると思うのではなく、プロジェクトのメ

ンバーが働きやすい環境をいかに作るかが課題である、ということ、を、再認識させられるエピソードなのでした。

(\*1) 阿部国治「盞結くすきゆい」(新釈古事記伝2)、日本講演会、2000年刊

(\*2) 阿部国治「少彦名くすくなさま」(新釈古事記伝3) 日本講演会、2001年刊